

「春へと動く生命の息吹」(協同組合通信/日和見論弾)15.3.12

NOAAや気象庁の発表によれば、エルニーニョ現象が終息に向かっている。大自然の動きは不可思議。人間の都合などお構いなし。たかだか百年の自然科学の予測通りには推移しないことを改めて思い知った。大いに勉強となった珍しい冬から早くも春に向かって生命の息吹。東京練馬では沈丁花の橙色の花が咲き、濃厚な香りが周囲に漂い出した。

夜道を急ぐ重い足取りも、強い芳香に思わずしゃんとなる。二十四節気「啓蟄」の頃。陽気が地中に至り、ちじこまっていた虫が、穴を開き出てくる頃。生きとし生けるものが再登場しエネルギーが溢れる日々が近い。また一つ年を感じ、別れとスタートが交差する。

生物季節によれば、モンシロチョウが見られ、鶯のとうが咲く頃である。気象庁のある大手町では、最早その姿にお目にかかれることはなくなってしまった。実際に蝶が飛び始めるのは、もう少し先になるが、農家にとっては待ち望んだ畑仕事が始まる事を、教えてくれる。虫に負けず、納屋で農機具の手入れが始まり、てぐすねひいて春に備えている農家が天気を見る目が真剣になってきた。三寒四温が終わる頃、いよいよ一年の計が始まる。

平成になって以来、急ブレーキがかかりっ放しで右往左往の日本である。さしもの日本固有の美点とされた年功序列は姿を消し、異常気象以上に先行きが見とおせない。ここは一つ芽吹く柳に倣って、風に柳とさらさらと行こうか。

降りかかってきたWTO農林漁業問題は、性根をもって臨まざるをえない。

便利だ効率だと、お仕着せの経済や生活様式へと戦後に宗旨変えした無節操が問われている。日本には独自の文化・文明・産業があることを、再評価・強化したい。インターネットは情報の処理・収集・判断に欠かす事は出来ないツール。今足りないものは、技術はもとより、志であり精神の核である気がしてならない。春待つ生命が動き始めるこの時期は、初心に帰へれと呼びかけてくる。

晋の昔の漢詩にある「帰りなんいざ、田園まさに荒れなんとす」。太古から、人はいつも、田畑と共に悩み・苦しみながらもしっかり生きてきた。

(気象情報システム株式会社 高津 敏)